

---

## 妖幻抄 6章

維月十夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

妖幻抄 6章

### 【Nコード】

N0930A

### 【作者名】

維月十夜

### 【あらすじ】

朝、傍に氷雨がないことに、機嫌を損ねる明。しかし、それが、二人の絆をさらに深めることに。互いを必要とし始めた二人は、あの夜、愛を誓った。

## 二人の絆（前書き）

どうも、維月です。

今回は、かなり恋愛っぽいです。

ろくな経験もないのに、滅茶苦茶書いてしまい…恐縮

## 二人の絆

朝、明は飛び起きた。

寝過ごしてしまったのだ！

氷雨が、いない。

明は、うろつろと小屋の中を、歩き回った。

「氷雨っ、どこ？氷雨ーっ」

外は、雨が降っている。

ひどい土砂降りだ。

「おいてくなんて…ひどい」

寢床に座りこみ、ぐずる明。

壁に、氷雨の枕を叩きつけてやる。

「明、ヒマしてないかい？にぎりめし、持ってきたよ」

そんな時、暖簾のれんをくぐって顔を出したのは、瀬那だった。

「ねえ瀬那、氷雨…見なかったか？目が覚めたら、いなかったんだ」

「ああ、さっき見たよ。疾風たちと一緒に、狩りに行ってくてさ」

「狩り、なんのだ？まさか、人間の…」

顔色を、変えて驚いた明に、瀬那は笑った。

「ああ、違うよ…今回は別物さ、烏兔うとの群れを追ってるんだ」

烏兔、と聞いた明の顔色は、みるみるうちに青ざめた。

名のとおり、黒い、兔の形をした妖魔だ。

外見に騙されて近づくと、ひどい目に遭う。

烏兔の爪と牙には、猛毒があるのだから。

「あっ、こら…明、どこ行くね！外は危険だっ」

飛びだそうとした明を、瀬那は、慌てて捕まえた。

「だって！」

「氷雨も、奴らに噛まれるほど、バカじゃないさ…ね？明、中に戻ろっ」

「瀬那、だけど…やっぱり心配だよ」

「明？」

片眉を上げる瀬那。

「ごめん…今の瀬那、なんか…氷雨に似てた」

俯く明に、瀬那は、ため息をついた。

「少し冷えるし、白湯を入れましようね、暖まれば…気も落ちつくさ」

「うん…」

明は窓から、白く濁った空を、見あげてから涙を拭った。

（氷雨、大丈夫だろうか？早く、帰ってきて）

「チツ！ちょこまかとつ、兎の分際で…」

地面は、雨のせいでぬかるみ、視界も、あまりよくない。

泥に、足を取られないようにしながら、立ち回りする氷雨。

泡を噴いて、襲いくる烏兎の顎を砕き、首を折る。

「疾風！平気かつ？」

「ああ、俺も、他のヤツらも平気だ…そつれにしても、ひでえなあお前、これじゃ…毛皮もとれやしない」

「知るか、こいつらが来るからだ」

「一匹くらいは残してやりな、明に、持ってってやりたいんだろ？」

「ああ…とにかく、ここ切り抜けるぞ！」

「おうっ！」

「明？ホラ、白湯だ…おあがり」

腕を差しだす瀬那に、氷雨の顔が重なって見え、明は、慌てて頭を振った。

「どうしたんだい？」

「瀬那、やっぱり、氷雨と似てる」

「そりゃあ、親子だからねえ」

さらりと言って、白湯をすする瀬那。

「えっ！おっとと…」

碗を落としそうになり、明は慌てた。

「あれ、言ってなかったつけ？」

「言っていない、瀬那が、氷雨の母さん！？」

「そうだよ。雨：強くなつたね、いやな雨だ」

「瀬那、雨降りはキレイなの？」

「好き、とは言えない。どうしても思い出しちまうのがあってね…  
あいつが、あいつって、氷雨の父親なんだけどね、こんな雨の日に、  
烏兎狩りに行って、冷たくなって帰ってきた。烏兎に噛まれて、即  
死だった」

「氷雨、大丈夫だろうか？そんなの、あたし：やだ」

「明：あの子は大丈夫、絶対に戻ってくるよ。母親のあたしが言う  
んだ、間違いない」

「瀬那：」

「それはそうと、明：子供はまだかい？みんな、聞きたがつてるよ」

「こっ子供！？氷雨の！？」

明は、湯気を出して赤くなる。

「恥ずかしがらなくなつて、いいじゃないか、一緒に棲んでるんだ  
し、そんなのがあつたつて、当たり前だろ？」

「う、うゝん」

「おや、雨が止んだみたいだねえ、すぐに戻ってくるよ。よかった  
ね、明」

「うん！」

子供の問題だけが、明の中で、尾を引いていた。

一方、氷雨たちは、川辺で足を洗っていた。

「明のヤツ、喜ぶかなあ？食いモンか、花の方がいいんじゃないか  
？」

「牙は抜いてあるし、心配ねえよ。俺が言つんだから、信じろ」

「はあ、胡散臭いが：信じてやろう。おいうさ公！明にケガさせたら、  
ただじゃおかねえぞ、うさぎ鍋か、襟巻きにしまっからなあ」  
「もこもこ、と暴れる革袋を、軽く叩いて、氷雨は言った。」

「それじゃ、雨もあがったことだし…帰るわ。明、早く孫の顔を見せておくれよ？」

「瀬那あ…それ、もういいからあ」

げんなり、と頂垂れる明。

「ん、なんの話だ？二人して」

ひょっこりと、顔をだした氷雨に、瀬那は目を丸くした。

「氷雨、なんだいその格好…子供みたいに、泥だらけで」

「明、たーだいま…ホレ、土産だ」

氷雨は、がなる母親を素通りして、明に、革袋を渡した。

「ありがとう、なあ氷雨…なんだ？中身」

「まあ、開けてみるよ」

「う、うん…」

（なんだろう…嬉しいけど、蛇とかだったら、殴ってやろうか）

袋の口をゆるめると、ふるるつ、と身震いして、子烏兎が出てきた。革袋が、落ちた。

「うつ、烏兎！？」

明は、瀬那の後ろに隠れてしまう。

「氷雨！？あんた、なに考えてるんだい！見なっ、明が怖がつてるじゃないか！」

「喜ぶかと思っただがなあ」がしがし、と頭をかきむしる氷雨。

氷雨は簡単に、調子者の疾風を信じた自分を呪った。

（疾風のヤロウ…ただじゃおかねえっ！）

「こんなモン、誰が喜ぶかい、このばか息子っ！」

氷雨の耳をつまんで、吼える瀬那。

「あ…こっち来た、烏兎」

栗鼠のような獣が、明に近づこうとしていた。

「えっ、ええっ！あ、あたしゃもう行くよ、じゃあねっ」

堪らなくなった瀬那は、そそくさと小屋を出て行った。

「あっ、逃げたなババア」

子烏兎は、じりじりと明と距離を詰めていく。

「おいで、おいで？お前、カワイイね、おいで」

子烏兎の、赤い瞳が、明をじっと見あげる。

「明、大丈夫なのか？」

「うん、こいつ…カワイイ。名前、つけてもいいか？」

耳を押さえながら、おそろおそろ聞く氷雨に、明はにつこりと笑った。

「名前ね、いいぞ。よかったな、チビ助」

「キイキイ…」

差しだした明の手に、子烏兎は、小さな鼻面を擦りつけた。

「珍しいな、烏兎は、かなり懐きにくいんだぜ？」

「でも、カワイイ…ありがとう氷雨」

につこりと笑う明に、氷雨は頬を掻いた。

「お、おう」

「ふかふかしてて、暖かいね、お前」

頬ずりする明、子烏兎も、懐いてるようだ。

はぶんちよの氷雨。少し、複雑な気分である。

なにやら悔しいので、明を抱き寄せて、炉端に座った。

「明…こっちこいよ」

「うん…」

子烏兎は、明の膝の上で、毛繕いしている。

「名前、決まったのか？」

氷雨は、子烏兎の小さな頭を、くしゃくしゃと撫でた。

「なにがいいだろう？なあ、氷雨」

「名付けて、案外難しいもんだな」

「ヨミ、闇をもじって…どうかな、まっ黒だし」

「いいんじゃないか？お前がいいなら」

「おいで…お前の名前だよ」

明は、ヨミを宙ぶらりんに抱きあげて、笑った。



日没後、明は、ぴよんと外へ飛び出した。

「はあ、雨あがりは、空気がいいなー」

「散歩、しないか？久しぶりに」

「うん、行こうっ、ヨミもおいで！」

「キーン！」

夜空は、雲一つなく澄み、月が出ている。

「こら明、あんまり先行くな…はぐれる」

「大丈夫、今は、ちゃんと鼻が利くから。それより、ヨミがいないんだ」

「心配すんなって、すぐ戻ってくるさ」

「氷雨え…」

心配そうな明を、氷雨は抱き寄せてやる。

二人は、村はずれにある、崖の上にいた。

「今朝は、悪かったな？一人にして」

明は、氷雨に抱きついて、首を振る。

「謝るな、寂しかったけど…今いるから、いい」

「なに泣いてんだよ？」

「な、泣いてないぞ…ばか」

明は、ごしごしと目を擦ってみせた。

「明、すまなかった、一人にして」

氷雨は、明の涙を、唇で拭ってやる。

「くすぐつたいよ…氷雨え」

「そばにいる、だから…もう、泣くな」

「うん、う…ん」

「好きだ…明」

（やわらかい、こいつは、なんて柔らかいんだろう）

氷雨は思った、このまま、攫ってしまえたら、どんなにいいだろう  
か。

けれど、それは許されないのだ。

「う…ん」

やがて二つの影が、一つに溶け合って、消えた。

「もう、離さない…一生、ずっとな」

「嬉しい…」

「…愛してる」

「ひ、さめ…」

うす青い荒野を、風が、撫でていく。

月が、見ていた。





## 受難（前書き）

妖幻抄6章だ！

やっとここまで来ました（＾＾）

まあ、楽しんで、読んでくださいな

## 受難

ヨミとじゃれていた明は、突然、瀬那に腕を掴まれ、小屋の中に引き込まれてしまった。

「せ、瀬那?! どうしたんだ」

「しっ、静かに! 隠れて、隠れるんだっ」

「誰なんだ、あの男は」

乗りだして、明は、氷雨と話している相手を見た。

「族長の狼牙、氷雨の祖父殿さ…それがまた、暴君で」

「氷雨の…祖父、か」

「氷雨、儂はな、お前のためを、思っ言っておるのだ。出来損ないの半魔なんぞを側において、恥をかくはお前ぞ? さ、その出来損ないの女を出せ、儂が殺してやる」

「明は、出来損ないなんかじゃねえし、てめえに、殺させるつもりもねえ。さっさと失せろ」

唸る氷雨に、狼牙は、うすく笑った。

「絆ほたされおって、バカめが…どけっ!」

「ぐっつ!?!」

狼牙は、氷雨を殴り倒して一瞥をくると、歩み寄って、背中を踏んだ。

「氷雨っ!?!」

明は氷雨の声に、瀬那の制止をふり切り、小屋から飛びだした。

「くっ、明…出てくるなって、言ったるうが」

「うるさいっ、お前が心配だったんだ! 文句あるかつ」

「明…」

「ほう、こいつが、例の半魔だな。見目よいではないか…」

「貴様、よくも氷雨を!」

明は、氷雨を背中に庇い、狼牙を睨みつける。

その目に宿るのは、憤怒だった。

「いい目だ、半分は泥とはいえ、さすが人狼の血よ。だが、所詮は半魔…純粋な妖の血には勝てぬっ！」

「ぐあっ！」

狼牙に蹴り飛ばされ、転がる明。

木に激突し、幹が、衝撃に軋んだ。

「明っ！？じじい、てめえっやめろっ！」

半身を起こして、叫ぶ氷雨に、狼牙は砂をかけた。

「うっ、くそじじいつ、げほっ」

「なんだその目は、え？孫を誑かしおってっ、死ねっ！死ぬがいいっ！」

「うっ！ぐはっ…がっ、っあ！？」

たて続けに蹴られ、明は蹲った。

「や、めろ…やめろ　　っ！！」

黒い巨体が、宙を舞う。

氷雨が叫ぶのと同時に、虎の声が吼えた。

「なっ、やめろっ、う、烏兔だと！？氷雨、おのれ！」

虎の声で吼えたのは、黒く、つややかな獣。

元の大きさより、何倍にも巨大化した、ヨミだった。

ヨミに踏み倒されたまま、気圧された狼牙は、氷雨に助けを求め始めた。

「氷雨、悪かった、謝る…小娘のことも、認めてやる。だから、助けてくれ。な？頼む、この烏兔に、言ってきかせてくれ」

「断る、ここまでしといて、助けてくれたあ？少うし、虫がよすぎんじゃねえか？あ？じじい…相っ変わらず、往生際悪いな。くたばるのは、てめえだよ」

「ひっ、氷雨え…頼む、老い先短い儂を思っ、ここは一つ…」

「知らねえな。ヨミ、そいつ、お前にやる」

赤々と燃える目が、ひた、と獲物を見つめる。

グルル、と喉を鳴らし、ヨミは牙を剥いた。

骨が、砕ける音、咀嚼する音がする。

氷雨は、明を抱き上げると、無言で、森に入ってしまった。

月明かりが射す、森の中……

氷雨は、明を抱きかかえていた。

「明、すまねえ……俺が、情けねえばかりに、ケガさしちゃった」

口許に滲む血を、湿らせた布で拭いながら、氷雨は俯いた。

「氷雨……ここ、どこだ？」

「明！平気かつ？どこも、苦しくねえかつ」

うつすらと、目を開けた明を、氷雨は抱き締めた。

「平気、だ、なんだ……泣くな、男だろ？」

「俺だつて泣く！」

「氷雨……」

「明……逃げよう、二人で、村を出るんだ！」

その時、チイッ！と鳴いて、茂みからヨミが出てきた。

「ヨミ……おいで、いい子ね」

クルル、と啼いて、ヨミは小さな、滑らかな毛皮をすりつけて甘える。

しかし、甘えていたヨミが、不意に動きを止め、小さく唸り始めた。

「狼牙の匂いだ……近づいてきやがる」

鋭く、舌打ちする氷雨。

ヨミは、首を振ると同時に巨大化し、明を庇って前に出た。

「フン……儂を甘くみるな、ガキめ！死んだと思うて、油断したなあ

……腕一つごとき、なくても不自由せぬわっ」

「じじい……てめえ、許さねえぞ！」

「ほう、氷雨……お前、一族より、この女を選ぶというのか」

「うるせえ……黙れ、それ以上ぬかすと、殺すぞ」

「あたしが行く、氷雨は……黙っていてくれないか」

明は、氷雨を後ろに押しやると、狼牙と向き合った。

「明！」



「心配ない、すぐ済ませる」

「大した口を利くが、半魔ごときに、なにができる！」

「うるさい…吼えるな、来いっ！」

明は、爪を構える。

彼女は、夜の姿である、人狼になっていた。

「小娘があ！儂を愚弄しおってえ　　！？」

狼牙が、めちやくちやに振りまわす刀をよけ、明は、とんぼを切つて着地した。

「これは…さっきの礼だっ！」

明は、爪を振りかぶる。

月明かりに、血が、しぶいた。

刀が弾きとばされ、乾いた音をたてて、離れた地面に転がる。

明の腕が、狼牙の胸郭を、貫いていた。

「小娘、き…さまっ、ゴフツ！」

「目には目を、というだろう…そうしたまでだ」

明は、腕を引き抜くと、狼牙の刀を拾い、切っ先を向けて言った。

「おの、れえ…半魔、の分際でっ」

「見くびるな！？」

「ひいっ！」

明は、切っ先を狼牙に突きつける。

「見くびるな…すべての、半魔が弱いということではない。心臓は避けておいたが、どうだ…息が苦しいだろう、肺を裂いたからな。

死ぬも、時の問題ということだ」

ヨミが、決めかねるように小さく唸り、狼牙に牙を抜く。

「ヨミ、そんなもん食うな…腹くだすぜ？」

氷雨は、ヨミを撫でると、狼牙の傍に屈んだ。

「氷雨、氷雨え！よく来てくれたっ、儂を、村に連れて行ってくれ」

掠れた声で、哀願する狼牙。

しかし、氷雨は、彼を冷ややかに見つめると、静かに言った。

「てめえは死ぬ、助けるつもりなんてねえよ…てめえのようなヤツ

でも、せいぜい土にでもなつて、役に立て」

「じきに、雑魚妖魔がくる…血の匂いに惹かれて」

明は、氷雨に寄り添う。

「俺たちは、村を出る。じゃあな、じじい」

「氷…雨」

狼牙は、うめきながら手を伸ばし、明の足首を掴んだ。

「小娘っ…儂は、死なん…必ず、お前…を殺す！名乗れえっ」

「明だ」

「そう、か…儂は、か、ならず、貴様、を殺しに行く！覚えておけっ」

明の足を離さない狼牙を、ヨミは、前足で薙ぎ払った。

「ぐおああ！？けはっ…」

狼牙は、枯れ葉のように吹き飛ぶ。

「行こう、氷雨…用は済んだ」

氷雨は、明を抱き寄せた。

「こい、明…村には戻らん。このまま、森を抜けるぞ」

巨大化したままの、ヨミが喉を鳴らして、明に甘える。

狼牙を放置し、二人は、静かに森を進んでいった。

「どうするんだ、氷雨…これから、どこに行く？」

明は、氷雨を見あげて聞いた。

「そんな顔するなよ、心配すんな」

そこまで言いかけて、彼は、動きを止めた。

「いるんだろ、母さん…」

風がわたり、木々がざわめく。

「氷雨、やっぱり行くんだね」

木の陰から現れたのは、瀬那だった。

「ああ」

瀬那は、明に歩み寄ると、彼女をきつく抱き締めた。

「おいで、明…血を分けてあげる、これで、完全な人狼になれるか」

ら」

瀬那は、手首を牙で傷つけると、明に差しだした。

「血を飲んで？また、じいさまは追ってくる。あんたに、不憫な思いはさせたくないんだよ…分かっておくれ、明」

「瀬那…あいつ、生きてるのか？」

「ああ、残念ながら。傷口が変色してた、烏兔の毒が回ったんだろ  
うね。あんたは、なにも悪くない。むしろ…礼を言うよ、ありがとう、明…あんたがやらなかったとしても、あたし達が殺してたさ」

「瀬那、すまない…」

明は、瀬那の血を、口に含んで言った。

「さあ、これでいい…キレイだね、明」

瀬那は、微笑んだ。

年を、感じさせない笑顔だった。

「母さん…」

氷雨は、しばらく母を見つめてから『ありがとう』と言った。

「なに言ってるの、あんたって子は！いいかい、明を大切にね、しっかり生きるんだよ？」

「ああ、母さんもな…長生きしろよ？」

「お前らしくないっいたら…ありがとうね。それと、その賢いあんたも、この二人を頼むよ？」

ヨミは、瀬那に近づくと、彼女の頬を舐めた。

承諾したようだ。

「あつたかい…頼んだよ？ヨミ」

ヨミは、クルル、と喉を鳴らして、それに応えた。

「さあ、お行きよ…夜が明ける」

明が、頭を撫でると、ヨミは身を低くして、騎乗を促す。

明は、ヨミの背中に乗り、氷雨も同じく後ろに座った。

「ありがとう、瀬那…それじゃ、行くよ」

「うん、行って…世界を、見ておいで。幸せにおなり」

「ありがとう、行つてきますー！！」

走り出した、ヨミの背中から乗り出し、叫ぶ明に、瀬那は手を振った。

瀬那の姿が、小さくなる。

見えなくなっても明は、いつまでも、後ろを見つめていた。

「お行き、先駆けの風よ」

二人が去ったあと、瀬那は、ぼつりと呟いた。

「行きましたか、やはり」

隣でした声に、瀬那は、勢いよく振りむいた。

「十六夜さん！？いつからいたんですか…」

「今さつきですよ」

にこにこ、と笑いながら言った十六夜に、首を傾げる瀬那。

「はあ…」

ヨミは、うす明るい、夜明けの平野を走っていた。

明は、過ぎゆく風景に、目を細めた。

どこまでも続く、青草の海。

朝陽を受けて、キラキラと輝いている。

「きれい…」

朝焼けに染まる草原を見て、明は、うつとりと言った。

「明、寒くねえか？風が冷たい」

「全然、なあ…氷雨、これから、どこに行くんだ？」

「そうだよな、村出たはいいが、行く先が決まってねえと」

「ヨミ、ヨミ、ちょっと止まってくれ！いい子だ」

明は、ヨミの首筋を、優しく叩いた。

クルル、と啼いて、ヨミは止まる。

「どうしようか、このままじゃ、行く宛もない」

伸びをしてから、明が言った。

明と氷雨が、背中から降りると同時に、小型化するヨミ。

「そうだなあ、取りあえず…村落を見つけるこったな。食いモンと、寝床が必要だろ？」

「そうだな、ヨミおいでっ、行くぞっ」

「キュウン！」

二人と一匹（？）は、とりあえず、村落を捜すことにした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0930a/>

---

妖幻抄 6章

2010年10月10日01時01分発行